

お話の論理

長尾 豊

論がさう成らないとしても、少し突き詰めて聞くと、どうもさういふ意向らしく思はれて来る。

幼児はお話を喜び、子供は聞くことを好むといふことは、それがどんなお話であつても幼児に喜ばれ、たゞの出たらめを聞かせても、子供が聞くことを好むといふ意味にはならないと思ふ。勿論これはお話といふものを調べ、お話と小さい聞手の關係を考へて見た者のいふことで、學者や教育家に従へばまんざらさうでもないらしく、子供は聞くことを好むからどんな出たらめでも聞き、幼児はお話を喜ぶものだから、それがどんなお話であつても喜んで聞くといふ結論になるらしい。結

論がさう成らないとしても、少し突き詰めて聞くと、どうもさういふ意向らしく思はれて来る。假に今までの心理學の教へるところがさうであつたとしても、お話の心理としてこれから考へられる問題は、子供が喜ぶからどんな辻褃の合はない、タワイない出たらめを聞かせても好いなどいふ淺薄なことであつてはならないと思ふ。又假にお話の心理がさういふものであるとしても、お話の教育としてこれから考へられる問題は、もつと違つたことが取扱はれなければならぬと思ふ。

學者や教育家の多くが、なぜさういふ意見に傾

くかと言へば、これは一面に無理のないことで、お話を文學として、藝術として考へないからである。教育の一手段であるお話も、幼児の生活と密接の關係ある幼児の文學としてはじめて活用されるのである。幼児の文學でないお話を持つて來ても、おそらく、幼児の喜ぶものとは成らないのであらうし、又もしさういふ似て非なるものを持つて來て、聞手を喜ばせることが出來たとしても、それは明らかに間違つてゐるのだらうと思はれる。

二

今日、文學と言へばたゞちに文壇の文學といふ意味に解されやすいが、お話文學や兒童の文學といふ場合には、むしろもつと廣い意味に解して、いはゆる藝術的な創作童話、近代的な個人的作品とのみ限るべきではない。ひろい意味での民族文學などのやうに、兒童文學と稱したいが、されば

と言つていはゆるデアリズムの、悪い意味でいふ民衆文學などのやうに、よくも悪くも世界的流行で押片附けてしまふやうな風には扱ひたくないと思ふ。むかしお話文學として大人と子供を喜ばせたお話が、一部分兒童のためのものと成つて異常な發達を遂げたのは、お話が文學として子供の生活に當嵌る構造をもつてゐたことが、その原因のひとつであらうと思ふ。するとさういふ意味で文學でないものはお話でないとも言へる。

ところでさういふ子供の喜ぶお話文學といふものにくらべて見れば、今日の藝術童話、創作童話は、餘りに大人の文學であり過ぎる。個人の創作慾を満足させるだけの創作で、「話」といふやうな形式を無視した、さういふ意味でいふ文學でないものでさへある。お話を文學として、藝術として考へるといふことは、この藝術童話、創作童話をそのまま受け入れる意味ではない。むしろそれと

は別にお話文學といふものを採し出して、それを
児童のためのものにするのである。むかしく
のタワイないお話、或人に言はせれば育兒部屋の
隅にころがつてゐるがらくたが文學だと言へば、
承諾しない人も少なくなからう。西洋の文學者と
言はれる人の中にも、これを承認しない向きもあ
る。

ところが西洋の教育家やお話の研究家は、早く
からこの民族童話 美と力とを認めて、教育的に
考へて世界的に有名な創作童話の上に置かうとす
る。つまり児童のためのものといふところに立脚
して考へるのである。けれども假にさういふ人達
からの援助を仰がないとしても、お話は立派に文
學であり、その構造から表現一切が文學として考
へられるもの、言換へれば文學として考へられ
なければ分らないものだと思はれる。

三

最も見易い例はお話のもつすぐれた構造のこと
である。どのお話を取つて調べて見ても、育兒部
屋の隅にころがつてゐるからした「それ自身に寶
玉のやうな詩がある。そしていはゆる藝術童話、
創作童話に最も缺けてゐるのは、このすぐれた構
造お話の構成力である。世界最大の創作童話家
であるアンデセンをして、「お話を拵へるのはむづか
しい」とその作品の中で言はせたほど、お話をつ
くのはむづかしいものである。容易に童話を創作
し得たといふやうなことを聞けば、誰しも其所に
出來上つたものが、創作でもなければ童話でもな
いことに心づく。どんな目新しいと見える話の
筋でも、大抵は何所にある形、あつた形、そしてこ
れからもなほしばらく繰返される形なのである。
いはゆる創作童話、藝術童話にこの筋を缺き、構造

を全く持たないといふことは、一面から見ればまことに至當な、賢明なやり方であると思はれる。

一見タワイない、辻褄の合はぬ出たらめと思はれるお話にも、仔細にたづねれば、確りした構造が隠れてゐる。お話の面白いのはそのためである。

構造をはじめとして、もしお話に論理といふものがなければ、話手の御都合主義によつて勝手法界に話されるものであつたら、お話は只ばかしくしただけで、決しい面白いものではなく、又そのストオリイ・プロットの構成から聞手の構成想像を刺戟するといふやうなことは出来なくなる。話されるものが『お話』でないといふことは、やがて教育的に考へても意味の稀薄なことになるらう。

お話は「有り得べからざることを語るもの」はあるが、たゞの大げなし、嘘げなしのみが喜ばれるのではない。やはり聞手の経験や想像にうつたへて、そこに面白いお話が語り出されるのであ

る。「お話とは何か。」この疑問に答へるのはむづかしいが、併し、たとへ一篇のお話でも仔細に検討すれば、その答に該當するなんらかの指示は惜しまないものであらう。

(六四頁よりつゞく)

球根類にありましては花の終つたものは結實させないで、なるべく花軸を摘みとり、チューリップなどの晩生種で丈の高いものには、風に折られぬやう支柱を立てる事、花後に一回施肥することなどその主なる仕事であります。

又これまでフレーム内におさまして觀賞して居りましたシネリヤ、マーガレットなどは、もう花壇に下して花壇を賑はせるやうに致します。

目立つ程のはでやかな花ではありませんが、同じくフレーム内に保護してありました、ヘリオトロップも花壇の一部分に植多込みます時は馥郁たる芳香を放ちます。